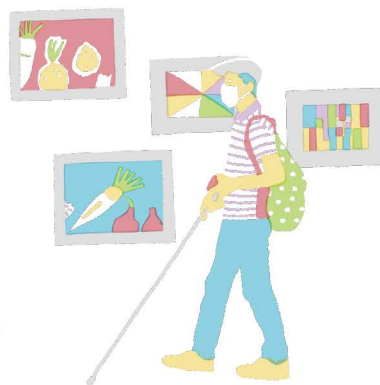


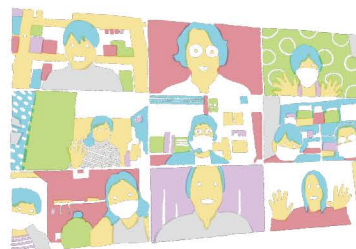


福島県
障がい者
芸術文化活動
支援センター



2021 年度報告書

はじまりの美術館



福島県障がい者芸術文化活動支援センター

2021 年度報告書

はじまりの美術館

はじまりの美術館について

はじまりの美術館は2014年6月に福島県耶麻郡猪苗代町に開館した小さな美術館です。2019年度より、福島県障がい者芸術文化活動支援センターとしても活動をはじめました。福島県内をはじめ、全国の障がいのある方々が自分らしく表現活動を行えるよう、また障がいのある方の表現活動にかかわる方々と一緒に悩み・考え、より良い方向へ向かえるよう、少しでも力になっていければ幸いです。

2021 年度の活動について

はじまりの美術館 館長 岡部兼芳

支援センターとして3年目、そして、いわゆる「コロナ禍」と言われる状況となって2年目となった2021年度。本年度は「関わりが及ぼす相互作用」や「ものごとの捉え方」について考えを深める1年になりました。

2020年に端を発した新型コロナウイルス感染症は、収束の見通しが立たない状況が今なお続いており、「新しい生活様式」はもはや日常になっています。ものごとを計画する上でも感染対策を講じることは前提条件であり、その意味では前年度より見通しも立てやすく、実施に対する心理的な抵抗も身についてきたように感じます。その様な中4月にスタートしたはじまりの美術館春の企画展「(た)よりあい、(た)よりあう。」では、全盲の美術鑑賞者・白鳥建二さんが、「写真家・しらとりけんじ」として、美術館の展示室で3ヶ月に及ぶ滞在を行いました。滞在中に開催された「白鳥建二さんと美術鑑賞」と白鳥さん出演の「映画『白い鳥』上映会&トークイベント」では、全国から様々なバックグラウンドを持つ方が来場し、やりとりが生まれました。

また、はじまりの美術館も様々な影響や刺激をいただいているたんぼぼの家・岡部太郎さんとのクロストークも、オンライン上ではありますが実現しました。そして、昨年度に引き続き「cento-シエント-福祉と表現にまつわる研修会」を開催しました。今年もzoomにて全3回開催し、参加者と登壇者で悩みを共有するなど、双方向の場作りを意識しました。

さらに、センター設立後継続している相談支援はより専門性の求められる質問もあり、その都度相談者の方に真摯に対応させていただきました。こちらも福島県の方のみならず、全国の障がいのある当事者の方や障害のある方の創作活動に関わりたいと思っている方、すでに関わっている方などから相談があり、メールや電話だけでなくzoomでの相談対応も増加しました。

「はじまりの美術館」という実際に来ることができる場があるからこそ、対面で自然発生的に生まれるやりとりを大切にしながら、オンラインやWEBを活用した情報発信やネットワーク構築を意識した1年となりました。

この報告書について

- ・2021年度に行なった事業を「相談する」「研修を受ける」「発表する・鑑賞する」「ネットワークを広げる」「情報を知る」のセクションにわけてご紹介しています。
- ・相談したいことや気になったことがある際は、お気軽にはじまりの美術館までご連絡ください。

「相談する」

障がいのある方の表現活動に関するアドバイスや、作品の展示等について相談や情報提供を行います。また著作権等の権利保護に係る専門的な相談にも、弁護士などと連携し対応しています。

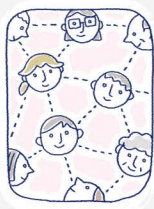


「研修を受ける」

障がいのある方の表現活動を支援するご家族や施設職員、また関心のある方などを対象に、研修会や上映会、トークイベントを開催しています。



支援センターの
取り組み



「ネットワークを広げる」

福島県内、近隣エリアの関係機関や関係者が、情報共有・意見交換を行う場を設け、ネットワーク化を図ります。



「発表する・鑑賞する」

障がいのある作家の調査を行うとともに、展覧会を企画・開催し、表現の多様性と魅力を広く伝えます。

「情報を知る」

福島県内、ならびに他県の障がいのある方の表現活動にかかわる情報を収集し、SNSなどで発信を行います。

支援センター事業について
2021年度の活動について

p.2
p.3

1 「相談する」

- ・ 2021 年度の相談事例
- ・ 相談の流れ

p.5

2 「研修を受ける」

- ・ 映画「白い鳥」上映会 & トーク
- ・ トークイベント ダブル岡部のやわらかクロストーク
- ・ cento - シエント - 福祉と表現にまつわる研修会
- ・ cento - シエント - 1 自分たちの活動の現在地を知る
- ・ cento - シエント - 2 地域の中で活動を紡いでいく
- ・ cento - シエント - 3 表現や魅力を製品などにして伝える

p.9
p.10
p.11
p.14
p.16
p.18
p.20

3 「発表する・鑑賞する」

- ・ けんじの部屋
- ・ 白鳥建二さんと美術鑑賞
- ・ きになるまちなか美術館 @ いわき市 平エリア

p.24
p.25
p.26

4 「ネットワークを広げる」

- ・ 全国の事業所や施設との連携
- ・ 南東北・北関東広域ブロック

p.30
p.32

5 「情報を知る」

- ・ はじまりの美術館の情報発信
- ・ 関連書籍

p.34
p.35



そう だん
「相談する」

障がいのある方の 表現活動に関する相談

2021年度は、52件の相談がありました。特に制作・発表、作品の商品化に関する相談が多い傾向にみられました。また、進路に関する相談や、著作権についての相談、作家の紹介の相談など、多岐にわたる相談が寄せられました。

Q. 「作品を売ってほしい」と言われたけど、作品の値段の付け方がわからない。

A. まずは、「画材の原価＋制作時間＋額縁の値段＋α」で考えて見てください。また、通常作品のサイズが大きいほど値段が高くなる傾向になります。それをベースに、自分はどうか、どのくらいの値段なら「売ってもいい」と感じるかという気持ちを大切にしてください。

画材の原価

紙やキャンバス、制作に使った絵の具や道具の量や費用がどのくらいか

制作時間

時給換算のイメージで、その作品の制作にどれくらい時間がかかったか

額装の値段

額縁に入れるなど額装をして販売する場合、それにかかった費用

プラスα

自分の気持ちや思い入れなど。作品として描いたか、落書きとして描いたかなど

Q. 利用者の方が創作している様子をスマートフォンでかっこよく撮りたい。写真撮影のコツを教えてください。

A. 写真を撮るときは、「何を伝えたいか」「何を残したいか」を意識して写真を撮りましょう。最初の第一歩となる、写真撮影の基本的なポイントをお伝えします。

1、フラッシュを使わずに明るいところで撮影する。

フラッシュを使うと印象が激しくなってしまいます。事業所の中で撮影に向く場所を探したり、日中明るい場所で撮影したりしてみましょう。逆光になる場合は、スマートフォンの画面を操作して光の量（露光）を調整しましょう。

2、自分やカメラの「影」が入らないようにする。

太陽の光や蛍光灯の光など、いま、光がどこからあたっているか意識して、影が入らないようにしましょう。

3、顔、手元、作品の細かいところなど、ピントをあわせる箇所を意識する。

スマートフォンの場合、自動でピントが合うことが多いですが、同じ写真でも、どこにピントをあわせるかで伝えたいことが変わります。何を伝えたいのか、少しだけ意識してみましょう。

4、スマートフォンの場合、カメラの設定で「グリッド」をつける。

グリッド（格子線）は、写真をバランスよく撮影するための補助線です。水平をとりやすくなったり、構図を意識しやすくなったりします。

また、制作風景を撮影するときには、様々な構図やパターンがあります。

- ・「作品」「手元」「顔」の3つが入るように撮影する。
- ・メンバーの方の「顔」をメインに撮影する。
- ・「作品」「ペン先や指先」が入るくらい「近くに寄って」撮影する。
- ・制作をしている様子や雰囲気全体がわかるように「引いて」撮影する。
- ・メンバーの方が作品を持っている様子を撮影する。

写真の使用用途や、メンバーの方の好みに合わせて、撮影してみてください。

Q. はじまりの美術館で作品を展示するにはどうしたらいいですか？

A. はじまりの美術館では様々なテーマの企画展を開催しておりますが、基本的にはテーマにあわせて美術館スタッフが選んだ作家を紹介させていただいております。ですので、展示のご希望に沿うのはなかなか難しい状況です。ただ、2017年から福島県出身または在住の障害のある方を対象とした公募展「きになるちひょうげん」を開催しております。もしご自身が、なにか障害に関わる診断を受けていらっしゃるようでしたら、こちらに応募することが可能です。こちらの作品展では、ご応募いただいた方の作品を少なくとも1点は展示しております。

Q. テレビ番組の企画をしている。福島県内在住で、立体作品をつくる障がいのある作家を数名紹介してほしい。（メディア関係者）

A. 2019年からはじまりの美術館が運営・公開しているアーカイブサイト「はじまりアーカイブス fukushima file」では、福島県内の障がいのある作家を約60名紹介しています。立体作品をつくる作家の方も複数いらっしゃるので、ぜひきになる作家を探してみてください。

よくいただくご質問

Q. どうすればもっと作品がよくなるかアドバイスがほしい。

A. どのように活動をしていきたいか、作者ご自身のご気持ちによりそって、作品をみてアドバイスさせていただきます。ぜひ作品や作品を撮影した写真をご持参ください。

Q. 障がいのある方向けの公募展情報が知りたい。

A. はじまりの美術館でまとめた情報をお渡ししております。各公募展の募集締め切り日に注意してください。また、障がいの有無に関わらず全国では様々な公募展が開催されているので、ぜひ公募展情報サイトなどをみて、気になるものに挑戦してみてください。

Q. 障がいのある子どもが利用できる絵画教室を紹介してほしい。また、福島県内で作品の展示ができるスペースを紹介してほしい。

A. 現在調査中です。把握している範囲でお伝えすることも可能ですのでお問い合わせください。また、情報をお持ちの方はお寄せいただけますと幸いです。

相談の流れ

ご相談は、ご来館いただいての「対面相談」、Zoom を用いての「オンライン相談」、メールでの「メール相談」を受付しております。

対面で相談ご希望の方

メールまたはお電話にて相談希望の日時と内容をお知らせください。



日程調整のうえ決定した日時に、はじまりの美術館にご来館ください。



はじまりの美術館オハコカフェにてお話を伺いいたします。
相談時間は30分～1時間程度になります。

オンラインで相談ご希望の方

メールまたはお電話にて相談希望の日時と内容をお知らせください。



はじまりの美術館がZoomのURLを設定します。指定の日時に、
Zoomに入室ください。



Zoom上でお話を伺いいたします。カメラと音声はONでご参加ください。
相談時間は30分～1時間程度になります。

メールで相談ご希望の方

メールに「お名前」「ご所属やご職業」「相談したい内容」
をご記入のうえ送信してください。



1週間以内を目処にご相談内容に返信させていただきます。相談内容によつては、何度かメールのやりとりを繰り返させていただきます。
※1週間経っても返信がない場合は迷惑メール等に振り分けられている可能性があるため、お電話等でご連絡いただけますと幸いです。

はじまりの美術館 無料相談窓口

TEL : 0242-62-3454

※火曜・展示入れ替え期間中休館

Mail : soudan@hajimari-ac.com

これまでご相談いただいた方
からのご感想

・ご丁寧に教えていただき、ありがとうございます。いただいた情報を元に、色々
とご縁を掴みたいと思います。

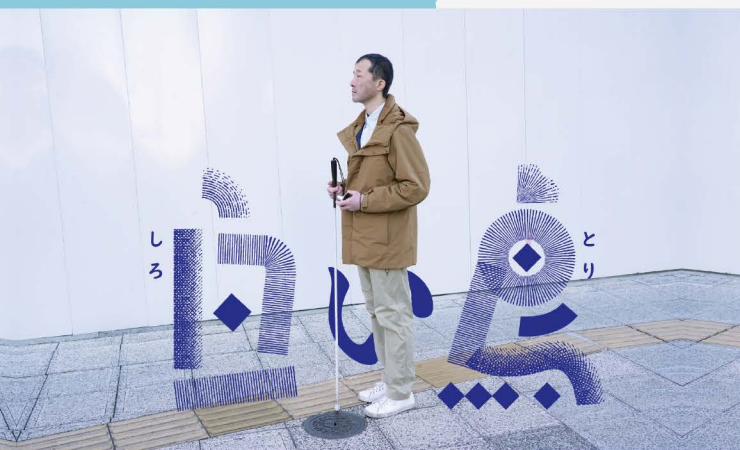
・〇〇展に入賞いたしました。展覧会に
自分の作品がならぶこととなり、とても
うれしく思っております。いろいろ相談
にのっていただき、感謝しております。
これからも制作の手を休めず、日々精進
したいと思います。

・お忙しいところ、私の言葉足らずの質
問内容に対し、ご丁寧に解答いただき
ありがとうございました。確認しないと
わからなかった情報でしたので、大変
ありがたく思います。

・資格や福島の職場、美術館などについ
て色々教えて頂きありがとうございます
した。特に学芸員の必要性や美術館の職業
について、インターネットで調べても
あまり出てこなかったのが初めて知った
ことばかりで驚きました。また教えて頂
いた障害者に関する記事など色々拝見し
たりしましたがどれも目からウロコで
「無償で相談して大丈夫なのか」と心配
したくらいでした…。今回の経験を参考
に今後の就活を頑張っていきたいと思
います。また相談したいと思った時はよ
ろしくお願いします。



けんしやう う
「研修を受ける」



映画「白い鳥」 上映会 & トーク

映画「白い鳥」上映会を開催しました。本作は全盲でありながら20年以上美術鑑賞を続ける白鳥建二さんを追ったドキュメンタリー作品。白鳥さんの鑑賞の様子や普段の暮らし、関係者の方の声を紹介しながら、異なる人々が一緒に鑑賞する「先」にはなにがあるのかに迫る映画です。

当日は約20名の参加者が集まり、映画上映後には共同監督の三好大輔さん・川内有緒さん、出演者である白鳥建二さん・佐藤麻衣子さんによるトークを開催しました。「ここでしか話せない話」をテーマに、4名から様々な裏話やエピソードが話されました。また参加者のみなさんからも多様な質問が投げられ、より映画を味わったり深めたりする時間となりました。アンケート回答者19名に「上映会の満足度」を伺ったところ、79%が「とても満足」、5%が「満足」、5%が「ふつう」、11%が未回答でした。

- 日時 2021年7月10日（土）18:00～20:00（映画本編50分）
- 会場 こどものひろばプリモ
（福島県耶麻郡猪苗代町大字千代田前田甲311-1）
- 参加者 20人
- ゲスト 白鳥建二、三好大輔（映像作家／本作監督）
川内有緒（ノンフィクション作家／本作共同監督）、
佐藤麻衣子（エドゥケーター／プログラムコーディネーター）

※ 手話による情報保障あり



参加者からのコメント

・映画すごくおもしろかったです！絵や作品ではなく人というのが楽しいから、その先に人の豊かさ、社会の豊かさがある、という言葉がとても心に残りました。マイティーさんが「とるにたらない会話をたくさんしていた」と言いましたが、その会話がとてもリアリティがあって、白鳥さんとみなさんの関係性の豊かさが自然とかんじられる映画でした。

・見えている人、一緒に鑑賞した人、撮影した人、それぞれの話、エピソード、お気持ちが細かい所まで伺えてとても楽しく、学ぶところが大きかった。

・「見る」という事、「何を」みているのか自分も含め、そこにいる相手や、何をみているのか、それとも見ていないのか、新しい「目」がうまれたような気持ちになりました。

・オンラインでも観て4度目の鑑賞でした。あなたとわたしはちがうよね。ということそのままだと面白がる。そういうことですよね、人と生きることは。子供たちともみることができてよかったです。



- 日時 2021年9月25日（土）15:00～18:00
※オンライン配信イベント
- 登壇者 岡部太郎（一般財団法人たんぼの家 常務理事）
岡部兼芳（はじまりの美術館 館長）

※UD トークを用いた文字による情報保障あり



対話を通してやわらかくなってみる

トークイベント ダブル岡部のやわらかクロストーク

企画展「やわらかくなってみる」の関連イベントで、岡部太郎さんと岡部兼芳の対談です。岡部太郎さんの所属する「たんぼの家」は、これまで「エイブル・アート・ムーブメント」や「アートセンター HANA」「Good Job! Center KASHIBA」といった福祉とアートのプロジェクトを通して、時代の先を捉えた社会を柔軟にする活動を続けています。はじまりの美術館との規模の違いはあっても、ふたつの団体に共通する特徴は「大切なものを守りながら、しなやかに、そして柔軟に変わっていくこと」、そして「組織やスタッフとメンバーの在り方や関係性の構築」ではないかと考えました。二人の岡部が「やわらかくなってみる」を軸に、これまでの気づきや取り組み、そしてこれからについて語り合いました。

おかべ たろう

岡部 太郎

一般財団法人たんぼの家
常務理事



1979年群馬県前橋市生まれ。1990年代半ば、高校時代から地元のNPOが主催するコミュニティアート活動にボランティアとして参加し、アートで地域と人の関係を変える取り組みに関心を持つ。2001年、大学を休学し「たんぼの家」に住み込みながら働き、2003年よりスタッフに。新しいアートの可能性を探る市民芸術運動「エイブル・アート・ムーブメント」に関わり、アートプロジェクトや展覧会、ワークショップ、セミナー、舞台などの企画を担当。近年では障害のある人と新しいしごとのあり方を探る「Good Job! プロジェクト」も推進している。

おかべ たかよし

岡部 兼芳

はじまりの美術館館長
社会福祉法人安積愛育園マネージャー



1974年福島県生まれ。共同作業所支援員、中学校教員を経て、2003年社会福祉法人安積愛育園入社。障がい者支援施設あさかあすなろ荘にて生活支援員として働く中で、知的に障がいのある利用者の表現活動をサポートする「unico（ウニコ）」に携わる。2013年より美術館開設準備を担当。2014年6月より現職。福島県文化振興審議委員、福島県立美術館運営協議会委員、福島県立博物館運営協議会委員、ライフミュージアムネットワーク実行委員、いわき芸術文化交流館アドバイザー、機関誌「手をつなぐ」編集委員も務める。

参加者がトークイベントの中で、印象に残った言葉やエピソード

・「アート」の概念は広がっている。物を作る、絵を描くだけでなく、人を繋げる、場を作る、政治、経済とも関わっていく。

・岡部兼芳さんのお話で「互いのあり方を認め合って目の前の課題を解決していける」という課題解決への意志を理念の中に含んでいることが素晴らしいと思いました。

・岡部太郎さんの「共に文化を創っていくスタンス」が大事とのことでしたが、作品という「モノ」を作ることが目的ではなくて、作品を作る過程を通じてスタッフ、利用者、家族、地域とつながっていく「コト」を重視されていることがわかりました。

・「評価やアドバイスの仕方は人それぞれ」。個と個の信頼関係がまず土台にあることの大切さを教えていただきました。



社会を柔軟にする、「たんぼぼの家」

岡部兼芳（以下、兼芳） まずは岡部太郎さんから、「たんぼぼの家」の活動の概説をお願いできますでしょうか。「たんぼぼの家」は福祉とアートの分野では、常に第一線にいる団体です。最近取り組まれているプロジェクトもぜひ伺いたいです。

岡部太郎（以下、太郎） まずは、たんぼぼの家の代表的なアーティストから紹介しましょう。一人目は山野将志（やまのまさし）さん、彼は描き方がすごく面白い。世界遺産や絶景を集めた写真集をじっくりと見てから描いていくのですが、そのときの思考の流れが、私たちが描くときとは全く違うのかもしれませんが。もう一人は伊藤樹里（いとうじゅり）さんです。彼女は自分や家族、スタッフらが飲んでいる薬の包装シートを毎日集めています。一つや二つだとゴミですが、1〜2万という数になると、現代アートに見えてきます。本人が大事にしていることであれば、たとえ福祉の世界で問題行動と言われるようなことでも、まずは見守ることがたんぼぼの家の文化です。樹里さんは本当に心やさしい人。身近な誰が何の薬を飲んでいるかを知っているの、薬の包装シートを通じて、身近な人たちへの気づかいをしているのではないだろうか、とご家族やスタッフは考えています。そうした気づかいが仕事や表現につながるのかもしれない。

私は、1995年からたんぼぼの家が取り組む「エイブル・アート・ムーブメント」という活動を担当しています。この活動では3つのことをめざしています。それは、障害のある人もない人も一人ひとりが表現を通し社会を変えていくこと、誰もがアートに参加できる状況をつくること、それに加えてアートを仕事にすること、です。福祉の世界だけでなく、アーティストやデザイナー、企業、大学などの研究機関、行政、NPOといった、さまざまな分野とのネットワークを通して障a害のある人たちと可能性を探っています。「たんぼぼの家って、何をやっているかよくわからない」と言われることも多いのですが、その時々課題に応じて関係団体や専門・非専門家と協働しているため、見えにくいかもしれません。ここ10年ほどは、障害福祉、特に障害のある人の働く状況について、大きく次の3つの課題を感じています。

- ① 所得（工賃）が一般の仕事と比べると低い。
- ② 仕事の選択肢が少ない。
- ③ 個性や創造性をいかせる環境が少ない。

一般的なお労支援施設で働いている方の月給（平均工賃）がだいたい1万5000円（就労継続支援B型の場合）ほどで、ここから考えると、障害のある人が働くなかで、じゅうぶんな所得を得るのはまだまだ難しい状況ですよね。そこで2007年からたんぼぼの家を含め、障害のある人のアート活動支援をしている3つの法人があつまり、始めたのが、「エイブルアート・カンパ

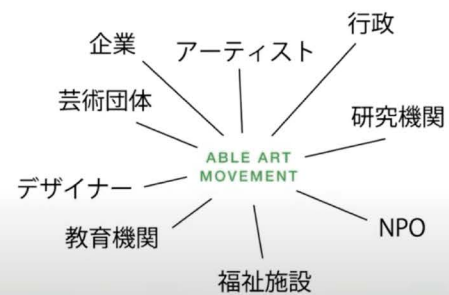
ニー」、アートを社会に発信する取り組みです。例えば、靴下をつくっている企業、Tabioさんとのコラボレーションでは、靴下に障害のある人が描いた絵柄をプリントいただいています。そのほかにも、障害のある人の個性や創造性がいきる事例を世の中に出しています。JAGDA（日本グラフィックデザイナー協会）とのコラボレーションでは、いろいろな絵柄のマスキングテープやタンブラーをつくって、その売り上げをパラリンピアン協会に寄付しました。これは、グッズの売り上げをパラリンピアンたちの活動支援にあてるかたちで、障害のある人自身が社会貢献をすることができた事例です。こうした活動を通して、新しい仕事や働き方を模索したりしている企業や団体、クリエイターたちがたくさんいることがわかり、それらをつなぐ取り組みとして「Good Job! プロジェクト」を2013年に始めました。この活動をさらに本格的に展開する拠点と、と2016年につくった場所が「Good Job! センター香芝」です。建築家のo+h（大西麻貴+百田有希）の設計の建物は、時間や天気によって室内の明るさや雰囲気が変化します。ここに来る人たちが自分で居場所を見つけことが、設計のコンセプトで、広い場所もあれば狭い場所もある。今回のトークのテーマに合わせて言えば、「やわらかい」建物です。最近の取り組みを二つ紹介します。一つ目が、著作権や知的財産権に関する学習プログラムづくりです。我々が40年間アート活動を支援しているなかで、著作権に関して、ちょっとしたことで悩む場面も多々ありました。一般の人でも知財、特に著作権などに関して、なかなか自分たちの考えを持つ機会が少ないことに気づき、だれでも知財を学べるよう、カードゲームなどの教材を開発し、それらをつかった学習プログラムを3年前から始めました。

もう一つが、伝統工芸や地場産業、地域のものづくりとコラボレーションする「NEW TRADITIONAL」です。例えば愛知県常滑市といえばやきもののイメージがありますが、常滑の土で布を染めたり紙を漉いたりするといった、やきもの以外の土の可能性を探りました。

障害のある人の「生きる力」を価値に

兼芳 支援員をしていた私がいま、はじまりの美術館で働いているのは、たんぼぼの家の「福祉をかえる『アート化』セミナー」に参加したことがとても大きかったと思います。このセミナーは、さまざまなジャンルのゲストを呼んで福祉とアートについて学ぶイベントで、20年ほど前から続いています。ほかの団体さんも、大きな影響をうけているところが多いのではないのでしょうか。たんぼぼの家で大事にされていることを挙げていただきましたが、それは具体的にどのような背景にもとづいているのですか。

全国、海外とのネットワーク
多様な分野との協働、連携



太郎 たんぼぼの家の活動で自分自身がヒントをもらえるのは、障害のある人の生活や、そこから生まれるつながりです。コロナ禍であらためて思ったのが、僕が出会う障害のある人は、生きる力をもっているということです。一緒に過ごすなかで、僕たちスタッフのほうが生きる楽しさに気付かせてもらっていると感じます。障害のある人から学ぶことや、価値をつくっていくことにまだまだ可能性がある、と思っています。

兼芳 福祉に携わる人のなかには、何かと抱えがちというか自分たちがやらなくては、と思い詰めてしまう部分もあります。そこをやわらかく開いていくところが、たんぼぼの家は本当に上手だなと感じています。質問が届いているので読み上げますね。一つ目は、「たんぼぼの家のスタッフさんから利用者さんの創作活動への関わり方はどのようなものでしょうか。作品の評価をしたり、制作技法のアドバイスをしたりなど、何か心掛けていることなどはありますか」ということです。

太郎 結論から言うと、人それぞれです。準備から制作まで自分でできるメンバーから、どんな表現をしたいか、どんなモチーフを描くかというところからスタッフが伴走するメンバーもいます。メンバーに対してスタッフが作品を評価するのか、聞かれることも多いのですが、それも人それぞれ。たんぼぼの家は、もともと障害のある人たちとともに生きる場をつくってきた歴史があるので、スタッフがメンバーの創作に対して「自分はこう思う」「こうしたらもっとよくなるのでは」など、対話をとおして制作をすすめる場面が比較的多いかもしれませんね。

福祉だけでは変わらない。文化をつくっていくこと

兼芳 二つ目の質問は「たんぼぼの家の事業はネーミングが素敵です。『Good Job!』『ニュートラ』など、初めて聞く言葉ではないのに新しい視点を加えている感じがします。どうやアイデアを出しているのか、コツのようなものがあれば教えてください」と。

太郎 理事長の播磨靖夫が、元新聞記者、ジャーナリストなので言葉は大事だということを言い続けていて、それが文化としてたんぼぼの家にあるのだと思います。何となく関西のノリみたいなものもある気がします。

兼芳 楽しみながらつくっていっちゃるような感じがしますね。物事をよく表しながらもやわらかさがあって、とてもいいと感じます。私からも質問します。「福祉をかえる『アート化』セミナー」のねらいとして、アートで福祉を変えたい



うことをおっしゃっていましたが、どういうことをアート化と考えていますか。

太郎 福祉の世界、福祉施設が可能性を秘めていて、その可能性を開かせたい、それを「アート化」と言っています。ただ、福祉施設だけが変わっても、その地域をはじめ社会が変わらない限りは、変化は起きづらいのではないかと。そのためには、地域や関わる人たちの存在、いわば「色」を出すことが大事だと思っています。障害のある人たちのためにやるというよりは、一緒に文化をつくっていくというスタンスです。最近思うのは、福祉業界がアートで盛り上がっている理由や成果を考えることで、福祉の視点から社会に発信できることがあるかもしれません。「アート化」セミナーでは、福祉施設にいる人の意識を変えたい、一緒に変わりたいという思いが起点ではありましたが、いまはその先の地域社会全体の変化もセットで捉えています。

兼芳 一般の人の感覚だと、アートは「美術館に飾られている作品」というイメージも強いです。我々の活動でも、母体の法人である病院担当者とアートの「作品ではない部分」を共有したのですが、どのように表現したらいいかを悩んでいます。そのあたりの上手な伝え方を、太郎さんは持っていらっしゃると思います。

太郎 そうした面は一言では表せないのが難しいですね。今でこそ、アートの概念が広く多様であることの認識がひろがり、表現するだけではなく、人と人をつなげる役割だったり、社会課題とリンクする例もあります。僕はアートの価値を、関わる人たちや地域の人たち自身がつくっていくことが面白いと感じているので、そこを一緒に考えようというのが一つの方法なのかもしれません。そうしたときに、美術館などの文化資源は異質な人たち同士をつなぐ場所になり得ると思います。既存のルールを疑ったり壊したり、あるいは枠を広げて豊かにしていくことが、アートによって可能になります。受け取り方が多様でいい、というのがアートのいいところで、そういう捉え方がこれからの文化をつくっていくのではないかと思います。

日本は震災やコロナ禍を経て、「世界は不安定」であることが前提になるなか、「やわらかいこと」がこれからの一つの価値になっていくのではないのでしょうか。そのやわらかさは、障害のある人たちの創造性から得られる気がしています。そういった人たちと関わり合って生きることが、福祉や医療に関係ない人たちにも広がっていくのではないかとと思うのです。そのときの接点として、アートがよい入り口になるのではないのでしょうか。



日時 2022年1月20日(木) 13:00~15:00
講師 板垣崇志(しゃかいのくすり研究所代表、
るんぴにい美術館アートディレクター)

いたがきたかし
板垣 崇志

1998年に障害者支援施設ルンビニー苑に出会う。同苑の運営法人による「るんぴにい美術館」設立計画に携わり、2007年の開館とともに同館アートディレクター。2016年から知的障害のある人が講師となって学校などを訪れる「であい授業プロジェクト」を企画。こうした活動を通じて人間の「表現」を基点にその動態を分析し、社会課題を解きほぐす道を探究する「しゃかいのくすり研究所」を2020年に設立、同代表。株式会社ワコムが2021年に設立した一般社団法人Connected Ink Village 理事。

- シェント -
cento-1

自分たちの活動の現在地を知る

「障害のある方との表現活動」の根幹とは。岩手県を拠点に活動をする板垣さんのお話から、表現と支援にとって重要なことを考えていきます。

「アート」という言葉を慎重に

入所施設「ルンビニー苑」で、板垣さんが臨時職員として働き始めたのは27歳のとき。美大を卒業してニート同然の生活を送っていた板垣さんに、実家の菩提寺住職でもあった施設長が寺で声をかけたのがきっかけでした。初めて訪れた施設で、裏紙などに描かれた絵に板垣さんは衝撃を受けました。それ以来、週に一度の美術クラブ担当として働き始め、2007年に開館したるんぴにい美術館の設立に携わりました。板垣さんが活動を続けて24年が経ちますが、『作品』や『アート』という言葉が当たり前になることには落とし穴がある」と話します。作者の表現を展示したり発信したりすること。るんぴにい美術館でも行っていますが、それらの活動は手放しにすべて「良い」とことはいえない、と板垣さんは考えます。それは「作者本人は自分たちがつくったものをアートとは捉えていないから」。まだ名付けられてない何か。そのことを支援する側が感じ取れるかどうか、とても大事なことだと言います。るんぴにい美術館では、展示や発信をする場合は作者の意志に照らしながら判断し、作者が誰にも見せない場合はそうすることが表現の正しいあり方だとしています。

作者の存在を肯定すること

さらに、「私もかつてはそう思っていました、表現に立ち会っているとどうしても『良い作品になればいいな』と思ってしまいませんか」と話します。自分が考える「良い」作品へ誘導するのではなく、本人が何を描こうとしているかを最大限に感じ取ることが重要と板垣さんは考えます。るんぴにい美術館では、本人の意志や希望を出発点に、材料を集めて選択肢を増やしています。たとえば、12色のクレヨンで描いていたとしても、実はこの人は色彩感覚が鋭いのではないか、という気配を感じたら色数の多い画材を用意。クレヨン以外にも本人が求めている画材を探ります。「これを使ってみませんか」と差し出すと、言葉では答えがなくても、表情が明るくなったり、描くことに夢中になったりすることがあるそうです。「本人が表現したいものは、支援者のイメージや予想を超えることが多いと思います。作者が世界をどう見ているのかを知ること、価値があるのではないのでしょうか」と板垣さん。こうした障がいのある人が、素直に安心して表現できる環境を整えることが、アート支援の根本だと考えています。最後に、アートを通した支援の先にあるものについて話しました。「一人ひとりが生きていくこと自体が最も肯定されるべきこと。それは福祉やアートの話にとどまらず、社会全体にとっての大きな命題です。存在を絶対的に肯定し、社会という枠の外に出されていた方たちの地位を取り戻すことが、アートを通した支援の先にあるでしょう。彼らが見ている世界を、私たちが知る必要がある。彼らの絵を社会に向けて発信することの意味は、そこにあると思います」。



SESSION

講師と参加者のみなさんの対話の時間

自分はこれからどういうことをしていきたいか。

- ・生きるという表現をよく察する。
- ・「何を描いているの?」と聞かない。
- ・作品に出会う場の仕組みを作りたい。
- ・より多くの選択肢を伝えられるようにしたい。
- ・事業所を作りたい。商店街を作りたい。



FEEDBACK

研修会終了後、参加者からのコメント

Q1. 印象に残った言葉や内容

- ・作品ではなく 作者を見つめる支援。
- ・やっていることの意味を、一旦まず肯定する。
- ・「生きる」と表現は、一人一人違うという事、福祉とは人の人生を支える。
- ・生きるという表現、の一部に絵を描く行為がある。

Q2. 「こんなことをしてみたい」など気づきやアイデア

- ・利用者さんともう一度話をしてみようと思います。
- ・様々な種類の画材を用意して本人が選択できるような環境を作りたい。
- ・メンバーを支援していく事で「視点を変える」の意味の広さや一人一人に向ける見極め方の大事さ。
- ・その人のために、というのが実は自己満足だったりするのかも…。改めて自身の活動について考え直したいです。
- ・当施設は「作業し生産する施設」ですが、いわゆる「生産的でない事をする」部門を作りたいと思います。...利用者から楽しい・続けたいと思えるような「こと」。

Q3. 講師の方へのメッセージ

- ・今回の研修会のお話を聴いていくなかで、自分が入所者さんの生きるという表現の可能性を狭めていたと思い、入所者さんと一緒に何かを作るときに、自分が思い描く完成形にならなくとも過程の中で入所者さんが沢山の様々な生きるという表現に出会える事が大切なので、失敗を恐れず色々な事に挑戦していけばいいのだと思えました。
- ・福祉の仕事というものを改めて問い直すきっかけにすることができました。また、普段何気なく使っている言葉の意味を捉え直すこともでき、視野が広がったような気がします。いつまでもお話を聞いていたいなと思いました。



- シェント - cento-2

地域の中で 活動を紡いでいく

クラフト工房 La Mano (ラマノ) は、東京都町田市の古民家で染めや織り、アート、畑での活動などを行っています。日々の活動や地域との関わり、ネットワークづくりについて伺いました。

地域とともにある、クラフト工房

施設長の高野賢二さんより、初めにクラフト工房 La Mano (以下、La Mano) と地域に関わりについて紹介がありました。緑豊かな自然も多く残る東京・町田市で、La Manoは1992年にスタートしました。障がいのある子どもたちが、支援学校卒業後に通える福祉事業所が少ないなか、手作業でものづくりができる場所をと、障がい児を対象にした造形教室を営んでいた先生と保護者らが立ち上げた工房です。

現在 La Mano では、37名のメンバーが染め、織り、刺繍、絵画などの創作活動や畑仕事などを行っています。布製品はおもに天然染料を使っていますが、La Manoは「使う人が、心や生活が豊かになるようなものづくりにこだわっています」と高野さんは話します。ものと同時に場づくりも大事な要素。築100年以上経つ古民家や裏山にある畑を少しずつ整えて、作業スペースやアトリエをつくってきました。そんな La Mano には年間延べ1000名ほどの地域のボランティアが関わり、製品づくりから畑や庭仕事などをさまざまな形でサポート。たとえば、こいのぼりは La Mano がつくる人気商品の一つですが、縫製はボランティアや近隣の福祉事業所が担当しています。また年2回、夏と冬に「染織展」というイベントを開催し、La Mano でつくったクラフト製品やグッズ、畑で採れた野菜などを販売したり、音楽イベントを開催し多くの来場者に施設を開放しています。こうして多くの人が集うだけでなく、地域のマーケットや手づくり市、公募展に参加するなど、施設の外へ出かけることも。そのほか、デザイナーや企業とのコラボレーション、東京都による文化事業への参加、地元中学校との綿栽培、町田市によるイベントや展示への参加など、官民間わずあらゆる協働を通して、La Mano は多様なチャンネルを広げています。

アトリエの外に出て、つながっていく作品

後半はアトリエを担当する朝比奈益代さんからおもにアート活動の紹介がありました。アトリエは後発した活動だそうです。染めや織りによるクラフト製品を中心に活動するなかで、決められた作業に向かない人や独創的な感性を持つ人のために、もっとのびのびとした活動をしてほしい、という思いから絵や刺繍など自由な表現を行うアトリエが始まりました。そのなかで、尾崎文彦さんや、稲田萌子さん、五十嵐朋之さん、宮田佳代子さん、平野智之さんなど国内外で評価される作家も生まれてきました。

地域とのつながりという点では、町田市内にある整形外科で La Mano の作家の複製画を展示しています。展示替えも定期的に行い、病院スタッフがその場の機能に合わせて作品を選定するなど、「患者さんにもとても喜んでもらっているけれど、実は働いているスタッフも作品を楽しんでいるというスタッフさんの話が印象的でした」と朝比奈さん。「患者さんが帰ったあとの静かな空間で、作品をみるのはとてもぜいたくな時間で、疲れが癒されるそうです。展示ができてとてもよかったと強く感じた出来事です」と話しました。

日時 2022年2月17日(木) 13:00~15:00
講師 高野賢二、朝比奈益代(クラフト工房 La Mano)



たかの けんじ
高野 賢二

クラフト工房 La Mano 施設長。学生時代に染色を学ぶ。2000年に同施設に入社以来、染色担当として、障がいのある人たちとのものづくりを模索。メンバーの絵を使った手ぬぐいや藍染のこいのぼりを企画し、また外部と協働したものづくりを進める。2006年にはアトリエ(アート活動)を始動。アート・クラフト・デザインの融合した商品制作に力を入れる。



あさひな ますよ
朝比奈 益代

クラフト工房 La Mano アトリエ(アート活動)担当スタッフ。美術大学で絵画を専攻。卒業後はさまざまな仕事をしたが、自然素材やクラフトに興味がありクラフト工房 La Mano と出会う。アトリエ立ち上げ当初から担当し、メンバーそれぞれの制作の変化や成長を見ている。

SESSION

講師と参加者のみなさんの対話の時間

みなさんの地域の中で関わりたい特色はありますか？

- ・「相馬野馬追」をテーマにした創作活動...馬牧場の見学から、地域の方と繋がればいいな。
- ・弊所の近くには雑貨屋や飲食店、温泉地などがあり、単独で動いているところがあるので、何か繋がりをもちて地域を盛り上げられるような関係を持てたらいいなと思いました。
- ・名産のだるまや伝統行事提灯祭り等と関われば素敵かなと思います
- ・自分の施設がある町のこと、そういえばあまり知ることができていないなあと実感しました。

みなさんは地域に(地域と)どのように関わりたいですか？

- ・「行きつけの・・・」を作りたい、増やしたい。
- ・子供たちの関りが少ないと感じるので、接点を上げてみたいです
- ・ふらっと訪れたい場所、誰かに教えてくれる場所、連れて行きたい場所。
- ・多様な表現に触れる機会を増やして、多くの方に芸術を身近に感じてほしい。
- ・地域全体で障害のあるかたや子ども、お年寄りの方を見守れるような環境作りができれば。



FEEDBACK

研修会終了後、参加者からのコメント

Q1. 印象に残った言葉や内容

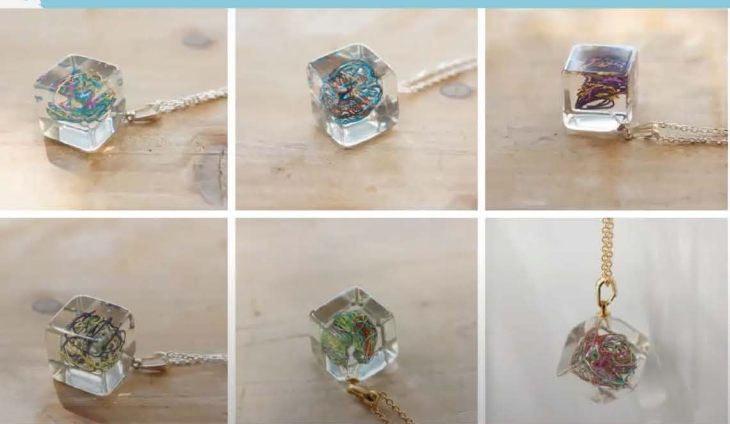
- ・つながるチャンネルはいろいろある。
- ・心と生活が豊かになるものづくり。
- ・利用者さん個々にあった表現法を見つけること。
- ・発表の場や制作工程など、「仕事の幅を広げる」という姿勢が、すごく勉強になりました。

Q2. 「こんなことをしてみたい」など気づきやアイデア

- ・公園にアートを展示することで動物園ができたように、○+△=□みたいなことを、色々な人を巻き込んでやってみてみたいです。
- ・Instagramでのハッシュタグによる参加型の発信。なるほど！と思いました。
- ・最終的な完成系だけを見るのではなく、その過程や材料、あるいは販売する場所にも目を向けると、もっといろいろなことができるようになるかもしれないと思いました。
- ・業務の中にアートを取り入れていきたいと思いました。

Q3. 講師の方へのメッセージ

- ・コロナ禍となり恒例だった町内会との交流がなくなったり事業所でも悩んでいます。今回のお話を参考に地域との交流を拓け、繋げていけたらと思います。
- ・長年の試行錯誤と継続と積み重ねだと思いますが、可能性を感じることができました。
- ・様々な制作をたくさんの方の画像で見ることができて様子がよくわかりました。スタッフの皆さんが、お一人お一人の個性を大事にし、濃い関わりを重ねていった成果だと思います。



- シェント - cento-3

表現や魅力を 製品などにして伝える

埼玉県川口市で、社会福祉法人みぬま福祉会を利用するメンバーの表現を社会につなげるための活動拠点「工房集」。表現をもとに製品を開発した経緯、大切にしていることやポイントなどを伺いました。

社会と関わることを探し、アートにたどり着く

みぬま福祉会は、重い障がいにより卒業後の進路がない人たちのために「どんな障がいがある人でも受け入れる」を理念に、1984年発足しました。現在は22の事業があり、300名ほどが利用しています。法人が大事にしていることは「困難は宝」ということ。困難を受け入れて特別に支援することで、結果的にみんなのものになる、という考えです。そして活動の軸に「働くこと」をすえてきました。その定義とは「お金を稼ぐこと」「社会につながること」「いきいきとした人間の発達につながること」です。初めはウエスづくりや缶をつぶすなどの軽作業が中心でしたが、それらを苦手としていたメンバーがいたことを機に表現活動が始まり、2002年には、地域に開かれた施設をめざしギャラリーを併設したアトリエ「工房集」ができました。表現活動のうえで大事にしてきたことは、「本人にとって生きるために必要なことは何かを考えること。頑張ることを強要するのではなく、本人が主体的にやっていくこと」だと宮本さんは話します。現在は運営職員による会議を通して方針を決めながら、アトリエ公開や、作品やグッズの展覧会、ワークショップ、カフェなどさまざまな事業に取り組んでいます。

工房集の商品企画と展開法

なかでも、グッズ開発は一つの大きな軸です。総勢150人ほどのメンバーによる絵、立体、木工、織物、スタンドグラスによる表現を、外部のコーディネートチーム・con*tioのアドバイスや運営委員会により企画を行い、製品化。それらを工房集のほか、ショップやカフェでの委託販売や年30回ほどの展示を通して販売しています。アパレルメーカーほか企業とのコラボレーションも行い、作品使用料をメンバーの給料に企てています。開発や制作を担当する渡邊早葉さんは、グッズ化で大事にしていることは「すでに表現されたものを、いかに製品にしていけるか」だと話します。市場調査や展示方法の勉強会も欠かせません。グッズ会議では、購入する人の年齢や仕事、買い物に行く場所など具体的なシミュレーションを行い、ターゲットを細かく設定して戦略を立てることもあります。そうして3年かけて企画された個人ブランド「さくらハート」は、成宮咲来さんがまるめた銅線を樹脂で固めたアクセサリ。そのほかスタンドグラスを使ったブランド「stained glass by KOBO-SYU」のガラスアクセサリやランプ、手織り製品のブランド「textile by KOBO-SYU」のバッグやポーチなども人気です。こうしたブランドのほかにも、カレンダー、ポストカード、レターセット、ポーチ、缶バッジ、Tシャツ、陶芸作品などあらゆる商品を展開しています。変わったものでは、金子隆夫さんの書いた言葉を集めた『生きるための名言集』もヒット商品です。2020年にはBASEを使ったオンラインショップを立ち上げ、商品数は400点ほどになりました。SNSなどの広報活動を通し、徐々に購買数も増えているそうです。

日時 2022年3月17日(木) 13:00~15:00
講師 宮本恵美、渡邊早葉(工房集)



みやもと めぐみ

宮本 恵美

社会福祉法人みぬま福祉会工房集管理者。埼玉県障害者芸術文化活動支援センター「アートセンター集」センター長。「工房集」の立ち上げに関わる。2009年より埼玉県障害者アート企画展の運営。2016年、県内福祉施設職員らと埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±0(タマッププラマイゼロ)を構築し県内の表現の発掘・発信を行う。



わたなべ さよ

渡邊 早葉

社会福祉法人みぬま福祉会工房集スタッフ。大学卒業後コピー機器メーカーに就職し営業職に就く。1年間イギリスの障害者入所施設でのボランティア活動を経て、2008年より現職。絵画や刺繍など表現活動の支援や展覧会の企画・出展、グッズ製作やオンラインショップの運営などを担当。

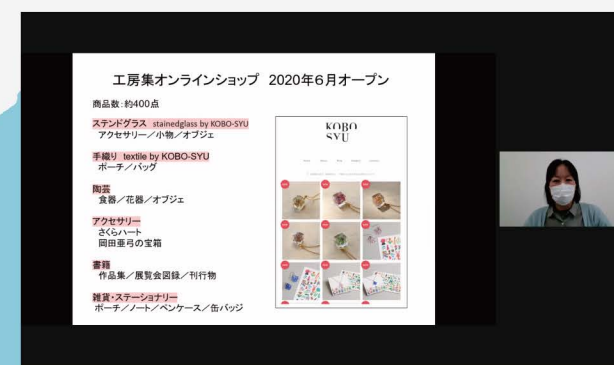
SESSION

講師と参加者のみなさんの対話の時間



製品化について悩んでいることやきになっていること

- ・現場のスタッフが「良い!」と感じる物が、ザ・福祉。どうしたら目指す方向が同じになりますか?
- ・作者の思いをどのように製品にこめるか?
- ・なかなか製品にならない。できない。
- ・商品化の時間をどうやって確保しているか? 製品化専門のスタッフはいるのか?



FEEDBACK

研修会終了後、参加者からのコメント

Q1. 印象に残った言葉や内容

- ・仕事に仲間を合わせるのではなく、仲間に合った仕事をする
- ・どんなに重い障がいがあっても働く権利がある
- ・商品を通して、社会の価値観を変えるために商品化している。
- ・製品を作る時、自分はその製品を買いたい、障がいがある人が作ったとお情けになっていないか。

Q2. 「こんなことをしてみたい」など気づきやアイデア

- ・うちの施設の利用者の表現方法を面白がってくれる仲間を探してみようと思う。
- ・色んな人を頼ってみたい!と思いました。
- ・福祉事業所として、日々の活動の中で利用者さんの得意なことを、好きなことを引き出せる時間を増やしていきたい。いきなり作品を創るというよりも、利用者さんに楽しみながら自己表現をしてもらう雰囲気づくりをしていくことから始めたいと思いました。
- ・自分がお金を出して買いたい! そんな風に思える仕事を続けたい。

Q3. 講師の方へのメッセージ

- ・とても分かりやすいお話しで、いつも“絵を描いてもらうだけ”で終わっていたものが、いろいろなやり方で製品化できるという、一歩を踏み出せるきっかけになった研修会でした。是非、明日からでも実践してみたいと思います。
- ・とても参考になりました。「工房集」の皆さんの熱意を感じることができました。
- ・利用者との日々の関りの中でその人にだけ出せる表現を引き出せるよう支援していきたいと思いました。社会に繋がる支援ができたかと思いました。

シエントの講師の方たちが関わる
事業所や施設などをご紹介します



るんびにい美術館

岩手県花巻市 / 社会福祉法人 光林会

2007年開所。社会福祉法人光林会が運営するアートと憩いの空間です。アートを通してボーダレス（境界のないこと）を目指します。ギャラリーではさまざまな企画展を開催します。世の中で流行しているスタイルや、美術史にとらわれず、「いま・ここ」の自分自身の奥深くから湧き出してくる表現。周りのことも、自分のこともすっかり忘れて、ただ一点を深く深く見つめることから生まれた表現。その存在のあるがままが、まっすぐ現れたような。その命の鼓動がそのまま伝わってくるような。そんな表現を、たくさんの方にお伝えしたいと思っています。美術館の2階にはアトリエがあります。

クラフト工房 La Mano

東京都町田市



1992年に障がいのある人たちが生き生きと働ける場として設立。名称の“La Mano”とはスペイン語で「手」を意味しており、施設の設立時に、障がいのある人たちの仕事として、手による物づくりを行なっていこうという思いから名付けられました。工房では、藍染や草木染などの天然染料で木綿や麻、シルクなどの天然繊維を使って、織り、染め、刺繍、絞りなどの商品を企画製造販売している他、デザイナーや他ブランドとの企画商品なども手掛けています。2006年からはアート部門「アトリエ」を開始し、原画の展示や商品のデザインに取り入れるなどユニークで個性豊かな作品や商品が生まれています。



工房 集

埼玉県川口市 / 社会福祉法人 みぬま福祉会

2002年にギャラリーのある障害者の生活介護施設として開所。工房集は仲間たちの「表現活動」を仕事として、社会に発信していくプロジェクトでもあります。建築家やアーティスト、家族、福祉関係者、企業など... 作家本人を中心に多くの人たちを巻き込みながら、本来の福祉施設の枠を超えた魅力ある場所として、多くの人が集っています。「そこを利用する仲間だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観を創るためにいろんなひとが集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めて、「集（しゅう）」と名付けました。



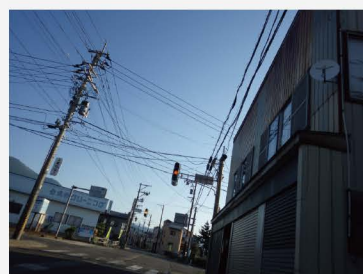
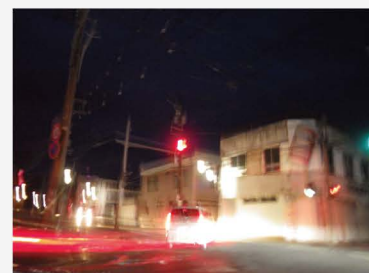
は、びょう かん しょう
「発表する・鑑賞する」



けんじの部屋

はじまりの美術館企画展「(た)よりあい、(た)よりあう。」の出演作家・しらとりけんじさんは、はじまりの美術館展示室の中に「けんじの部屋」を構え、滞在を行ないました。しらとりさんは全盲の美術鑑賞者であり、ご本人いわく「読み返すことの無い日記」のように写真をとる写真家でもあります。滞在中は毎日、展示室で過ごしお客さんとお話されたり、猪苗代町内にひとりで散歩に出かけて1日数百枚の写真を撮影しました。期間中撮影した写真の枚数は15,062枚にのぼり、けんじの部屋に設置されたiPadで閲覧できるようにしました。また展覧会会期中、1,107名の来場がありました。

日時 2021年4月17日(土)~7月11日(日)



参加者からのコメント

- ・白鳥さんの普段を再現すること白鳥さんの写真を展示することというアイデアがとても面白かったです。また白鳥さんの優しい人柄もとてもすてきでした。
- ・いろいろなことが知れてよかった。ルービックキューブやオセロ、将棋など、自分たちが使っているものがすこしかわっていておもしろかった。
- ・しらとりさんに会いに来ました。とても楽しかったです。そしてこの場所が居心地の良いこの空間がとても気に入っています。また来ます！
- ・白鳥さんから頂いた格言「時間をかければなんでもできる」これからの私の人生訓として... (アハハ) 前向きに生きていきたいと思います！

日時 2021年7月9日(金)、10日(土)、11日(日)
ナビゲーター
白鳥建二(全盲の美術鑑賞者)、
佐藤麻衣子(エデュケーター/プログラムコーディネーター)
参加者 各回5名



白鳥建二さんと美術鑑賞

はじまりの美術館企画展「(た)よりあい、(た)よりあう。」の関連イベントとして、「白鳥建二さんと美術鑑賞」を行いました。イベントには、はじまりの美術館がある猪苗代町内の方、美術関係者の方、はじまりの美術館常連の方、視覚に障がいのある方など、各回ともさまざまな方にご参加いただきました。最初に白鳥さんから鑑賞の流れなどをお伝えし、お互いに自己紹介してから鑑賞をスタートしました。じっくり作品を見つ、誰かがポツリポツリと印象を語ると、少しずつ話が膨らみ、後半は盛り上がりドッと笑いが起こることもありました。鑑賞後の振り返りの時間では、参加者の方より「最初は白鳥さんに正確に作品のことを伝えようという気持ちがあったけど、この場に集まったみんなで作品を前にどんな会話が生まれるのかが面白いんだと感じた」という発言がありました。一人で見るとよりじっくり作品と向き合い、そして参加した方々それぞれの感じ方で、一人でもメンバーが違えばまた話の転がり方が変わる。その場限りの面白さと偶然性があるワークショップでした。

参加者からのコメント

- ・いろんな人の意見を聞いているうちに視点がガラッと変わったり、正解がわからないもやもやを味わったり、一人で鑑賞しているときでは味わえない楽しさがありました。この面白さを「ミステリー小説」と例えていて、なるほど！と思いました。
- ・これまで、別の場所で対話型鑑賞を体験してきましたが、進行役(ファシリテーター)がいなくても鑑賞できるということがとても新鮮でした。はじめて出会った人達なのに昔から知っているかのような雰囲気とフランクな会話の中で作品をひもといていき、人となりを知れるのが楽しかったです。
- ・視覚障害のある人に、この作品を伝えたいと思ったときに、いろいろな疑問が湧いてきたのが新鮮だった。「伝えたい」というより「一緒に感じる」ことを大切にしようと思いました。



きになるまちなか美術館 @いわき市平エリア

社会福祉法人安積愛育園はじまりの美術館では、福島県から2017年より委託を受け、福島県内在住または出身の障がいのある方等を対象とした公募展の企画運営を行っております。今年度開催した第5回福島県障がい者芸術作品展「きになるまちひょうげん2021」では、応募総数342組、487点の作品が集まり386点を展示、51日間の会期中に1,425名の方にご来場いただきました。その関連企画として、お店などを営む人たちに「きになるまちひょうげん2021」からご自身のきになる作品を選んでいただき、店舗などに展示いただく「きになるまちなか美術館」を実施しました。今回はいわき市平エリアの8施設で、22作家33作品を展示させていただきました。まちを巡り、人と作品、そして人と人が出会うきっかけとなることを願い、企画しました。



- 会期 2022年2月19日(土)～3月21日(日)
- 会場 福島県いわき市平エリアの店舗や施設など
- 参加店舗
いわき芸術文化交流館アリオス
GuestHouse & Lounge FARO iwaki
健倅酒場 おたっしや・倶楽部
さわきや
SOCIALSQUARE Sports
もりたか屋
やがわせミクストコミュニティ enva
吉田屋呉服店

- 出展作家
青木尊、青山颯、石附若菜、小野広夢、蒲生卓也、近内沖尋、金平糖、酒井末希、佐藤琴羽、佐藤柊也、佐藤将希、三瓶雄大、zuoruren、多田翔悟、中川愛理、中島優太、芳賀大将、古川聖奈、正木柚衣、松崎妙子、松本秀勝、山名順子



近内沖尋

《謎の金属に足を踏み入れたら》

第一印象のインパクト。どうやって作ってるんだろう。タイトルも謎だし。近くで愛でてみたい。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



佐藤琴羽

《かがみもち》

買ってきたかがみもちではない、迫力や重量感にひきつけられます。むかし年末に親戚が集まって、みんなでワイワイおもちをついて、かがみもちをこしらえた、そんな楽しい思い出がよみがえってきました。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



佐藤琴羽

《なっとうごはん》

きっと、食いしん坊のひとが描いた絵ですよ。細かい描写とか関係なく、食べることへの愛や、納豆ご飯、パイナップル、かがみもちへの「想い」がストレートに筆に乗ってる感じで、とてもとても大好きな絵です。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



正木柚衣

《なににしてーの?》

正木さんは応募された3作品とも入選したそうですが、どれも別人の作品のようで、びっくりしました。そこにとても惹かれました。この作品「なににしてーの?」はデザイン的で色使いも手が込んでいて特にきになりました。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



蒲生卓也

《ツタンカーメン》

一見地味に見える作品だけれども、描き込まれ方を近くで観察してみたい作品です。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



芳賀大将

《我流昇天》

この「我流昇天」という作品は、この作家の良さのひとつである、流動的な勢いやうねりが、タッチと色彩と相まって飛び込んでくる感じが特によかったです。はじまりの美術館で展示されていた他の作品も微妙に作風が異なり面白いと思いました。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



佐藤琴羽

《パイナップル》

パイナップルって、外見のハードさと中身のジューシーさのギャップがありますが、これは絵というひょうげんで、見るからにおいしそうな熱れ熱れのくだものに描かれていると思いました。やっぱり食いしん坊の筆だよね。署名のパープルも効いている！
(いわき芸術文化交流館アリオス)



金平糖

《自然体》

よく見ると、これ、葉っぱと木の実ですか？そういう自然体と、モデルの脱力感ある自然体が素敵です。ダンボールのキャンバスと額も含めてトータルの組合せが最高です。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



松本秀勝

《みんな同じ星に住んでいる》

日本らしい土地が見えるから、きっと地球なんだと思いますが人間の姿はないですね。同じ星、と言いながら、宇宙にはみだしちゃってて、きになります。
(GuestHouse & Lounge FARO iwaki)



中島優太

《好きなもの》

執着的なエネルギーを感じる作品。「かんきせん」「せんぶうき」というワードが多いんですね。どうしてそれが好きなものなんだろう、とか想像してしまいますよね。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



小野広夢

《ロボット》

この作家さんの作品は、どれも興味深くて、展示しているいるな方に観て欲しいなと思いました。どの作品も素敵でしたが、スペースの都合上、1作を選ぶとしたらこの作品かと思い選びました。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



佐藤将希

《ハンバーガー》

頂上で円を重ねてると、セロテープぐるぐる巻きが独特のアクセントになっていて、目が離せない感じの作品でした。
(いわき芸術文化交流館アリオス)



松本秀勝

《こわい道》

道のような生きもののような、気配がある。不思議な魅力の作品です。
(GuestHouse & Lounge FARO iwaki)



松本秀勝

《クルマ社会》

自身もきになるテーマでしたので、来場者に何か感じてもらえたらと思いました。
(GuestHouse & Lounge FARO iwaki)



佐藤柊也

《恐竜スケッチ ティラノサウルス》

笑っているような、歌っているような、キュートな恐竜！
(GuestHouse & Lounge FARO iwaki)



佐藤柊也

《ティタノサウルス》

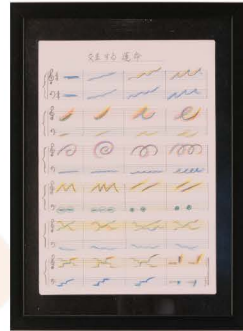
緑の青い枠にも恐竜が描かれていて、本当に恐竜が大好きなんだろうな、と思いました。
(GuestHouse&Lounge FARO iwaki)



佐藤柊也

《恐竜スケッチブラキオサウルス》

見たとき自然と笑顔になりました。ラウンジに遊びに来てくれる子供たちの顔が浮かんで、一緒に観たいなと思いました。
(GuestHouse&Lounge FARO iwaki)



酒井未希

《感じる音楽》

それぞれの符号がどのような音を奏でるのかとても気になりました。
(健倅酒場 おたっしや・倶楽部)



多田翔悟

《路線図》

表現から、これまで気づけなかった電車のかっこよさに気づけたので、とても気になった。生きているみたいで好きです。
(もりたか屋)



三瓶雄大

《恐竜超図鑑》

こんな図鑑見たことない！「超」かっこいい！3歳の娘と鑑賞したら「超」盛り上がりそう。
(もりたか屋)



山名順子

《無題》

海月とかいてくらげと読みますが、まるくカラフルな円盤にひらひらと舞う姿を思い重ねました。作者は表面に手をかけながら、裏から見られることも想像していたのでしょうか。上から眺めるか。それとも見上げるか。明るいところ、風のあるところ、どんな空間で見てみたいか、などと気が付けば様々な思惑を巡らせることに、気になった理由があるようです。
(やがわせミクストコミュニティ enva)



石附若菜

《さんかく》

直線と角の組み合わせが美しい宝石のように見えます。実際に存在したらどのような宝石なのか気になりました。
(健倅酒場 おたっしや・倶楽部)



正木柚衣

《ただいま里帰り》

躍動感と臨場感が伝わる絵で、店舗内でのライブ感を出す手助けをしてくれそうだから、この作品を選びました。
(さわきや)



青木尊

《富士山》

とても包容力のある赤富士で店内の気を高めてくれそうで、きになりました。
(さわきや)



中川愛理

《ぶりんせすりりー》

こんなにもたくさんの色をつかっているのに少しも濁らず、むしろ透明感さえ感じます。恥じらうように少しうつむいた花柱や、可憐に花びらを広げる姿はまさにお姫様のような。女の子が大好きな色がたくさん重なる、眺めていると幸せ気分になる愛らしい魔法の花。
(やがわせミクストコミュニティ enva)



石附若菜

《線》

緻密に描かれたきらめく線たちは、銀の鎖のようにも氷霜まとう樹皮の連なりにも見えました。規則性がないようでいて一定のリズムが躍る線たちの連続性は美しく、繊細で丹念に表現する作風に作者の静かな情熱を感じます。無彩色でありながら光を感じる表現に心打たれ、きらめきの源を間近で見てみたいと感じました。
(やがわせミクストコミュニティ enva)



松崎妙子

《チューリップ》

貼り絵なのか、切り絵なのか。モザイクタイルのような、油絵のような。花たちは春の風のなかをしゃらしゃらと音をたてて頭をゆらしているみたい。でも次の瞬間はびたっと時間が止まったようにも見える。時の流れがゆがむ花の群れ。
(やがわせミクストコミュニティ enva)



佐藤将希

《第5位はだれ》

第5位はだれ？「どれ」じゃなくて？なんで5位？そもそも何の5位？きになることだらけで、見た人と会話が弾みそうです。
人と人のつながりが生まれそうなこの作品を、事業所に飾ってみたいです。
SOCIALSQUARE Sports



石附若菜

《ぐるぐる》

作者はこの作品を描いているとき、どんな気持ちだったのかが気になります。同じモチーフを描き続けるのは没頭できて楽しい？何か不安な気持ちを表現したかった？画面で見て感じたザワザワ感を、実際に見て確かめてみたいです。
(SOCIALSQUARE Sports)



zuoruren

《無題》

事業所内で最も「きになる」との意見が多かった作品です。カラフルな色使いを見ると、わくわくするような、ざわざわするような、不思議な気持ちになります。細胞のようにも血管のようにも見えて、何か意味がありそうなのに、なぜ「無題」なんだろう？ととてもきになります。
(SOCIALSQUARE Sports)



zuoruren

《涙》

展示期間中は春本番を迎える少し前。当店では着物を扱っており、季節を先取りして着物の柄をディスプレイします。丁度期間中は桜の着物を展示予定です。その桜の着物に負けないパワーを感じました。雰囲気明るくなり、いよいよ春がやってくることを想像させてもらいました。
(吉田屋呉服店)



古川聖奈

《寅丸》

今年は寅年。そんな今年だからこそ！ということ、寅というものの凄く迫力があるものが多いが、綺麗な丸を基調にして、可愛い作品になっていると思います。
(吉田屋呉服店)



青山颯

《カブツ》

カブは昔から縁起物として知られています。丸々とした成長した体と、青々と茂った葉、食べると元気になれると思う選ばせて頂きました。
(吉田屋呉服店)



いわき芸術文化交流館アリオス

展示作家：小野広夢、蒲生卓也、近内沖尋、金平糖、佐藤琴羽、佐藤将希、中島優太、芳賀大将、正木柚衣



GuestHouse & Lounge FARO iwaki

展示作家：佐藤柊也、松本秀勝



健倅酒場 おたっしゃ・倶楽部

展示作家：石附若菜、酒井未希



さわきや

展示作家：青木尊、正木柚衣



SOCIALSQUARE Sports

展示作家：石附若菜、佐藤将希、zuoruren



もりたか屋

展示作家：多田翔悟、三瓶雄大



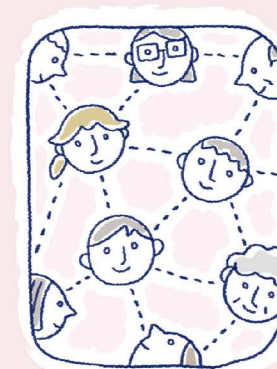
やがわせミクストコミュニティ enva

展示作家：石附若菜、中川愛理、松崎妙子、山名順子



吉田屋呉服店

展示作家：青山颯、zuoruren、古川聖奈



「ネットワークを広げる」

はじまりの美術館では、全国で先駆的な活動を行う事業所やアトリエなどを訪問し、ネットワークを広げています。そうした成果は、展覧会事業や研修会などの形で紹介し、福島県内の方々へ知っていただいたり、出会っていただく機会を作っています。訪問先では制作の様子を拝見したり、意見交換を行ったりしました。今回コロナ禍もあり、メールや電話などでのやりとりを重ねさせていただいた事業所もありました。

(た) よりあい、(た) よりあう。展

みずのき美術館（京都府）

みずのき絵画教室に所属していた岩本勇さん、小笹逸男さん、堀田哲明さんの作品を管理している、みずのき美術館を訪問しました。みずのき美術館は京都府亀岡市に拠点を置く社会福祉法人 松花苑が運営する美術館として、2012年に開館。かつて絵画教室として使われていたアトリエや作品の収蔵庫を見学させていただきました。



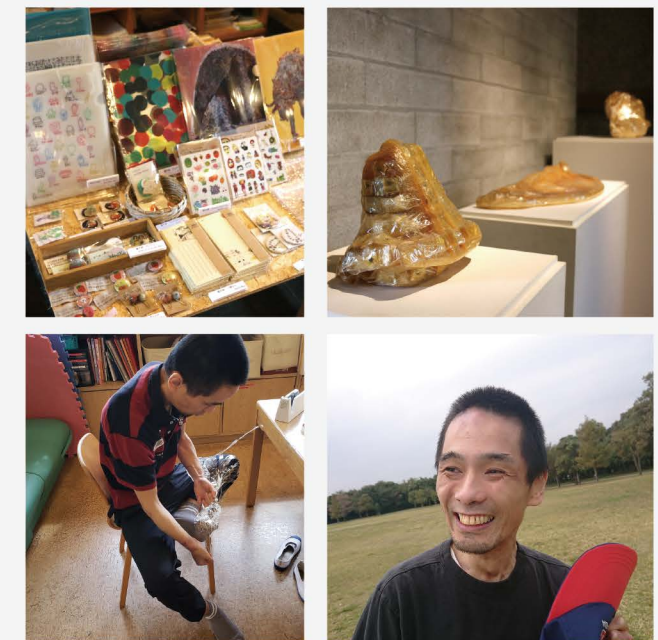
クラフト工房 La Mano（東京都）

元スタッフの「美保さん」をモチーフに作品をつくる平野智之さんが所属するクラフト工房 La Mano。東京都町田市に1992年に設立された、緑にかこまれた染織工房です。藍染め、草木染めなどの染色と、はた織りが行われ、アトリエ（アート）の活動も行われています。平野さんは自宅で絵を描き、La Mano ではパソコンを使って文字を書いています。

やわらかくなってみる展

あし 葦の家（福岡県）

葦の家は1985年、福岡県福岡市で無認可作業所としてスタートし、現在ではさまざまな地域在宅支援事業を行っています。今回、梅木鉄平さんの作品を展示させていただくこととあわせて、制作風景の動画の撮影協力を依頼しました。また、マスキングシールやアロマストーン、フェルト製品など葦の家のオリジナル製品も販売させていただきました。



たんぽぽの家（奈良県）

たんぽぽの家は、1980年奈良市六条地区に開所。2004年にたんぽぽの家を増改築して、「たんぽぽの家アートセンター HANA」がオープン。障害のある人たちが絵画や立体造形、テキスタイル、陶芸、演劇、ダンスなどのアート活動に打ち込めるスタジオやギャラリーを完備しています。中村真由美さんの制作風景を見学させていただいた他、展覧会会期中に、中村さんの張り子作品や製品を販売させていただきました。

南東北・北関東ブロック

はじまりの美術館は福島県の「障がい者芸術文化活動支援センター」として活動しています。厚生労働省では全国の各都道府県に1箇所ずつセンターの設置を目指しており、令和3年度は37の自治体でそれぞれのセンターが活動しています。また全国の連携事務局のほかに、国内を7つのブロックにわけ、ブロックごとに「広域支援センター」が設置されています。福島県は「南東北・北関東広域センター（宮城、山形、福島、栃木、“以下、未設置県”茨城、群馬）ブロックに含まれ、宮城県のNPO法人エイブル・アート・ジャパンが広域支援センターを担っています。

今年度は、ブロック内で支援センター自身のステップアップのためのオンライン研修や支援センター未設置県である茨城県でシンポジウムなどが開催されました。支援センターとしての活動歴も異なるので、各県の状況や取り組みなど、意見交換をすることでお互い参考になることも多数ありましたので、今後の活動に活かしていきたいと思います。

[南東北・北関東ブロック]
宮城県、山形県、福島県、
栃木県、茨城県、群馬県

広域センター

宮城県・山形県・福島県・茨城県・栃木県・群馬県
南東北・北関東ブロック広域センター
実施：特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン 東北事務局

山形県 支援センター

やまがたアートサポートセンターら・ら・ら
実施：社会福祉法人 愛泉会 ぎやらりーら・ら・ら

宮城県 支援センター

障害者芸術活動支援センター@宮城（愛称：SOUP）
実施：特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン

福島県 支援センター

はじまりの美術館
実施：社会福祉法人 安積愛育園

栃木県 支援センター

とちぎアートサポートセンターTAM（タム）
実施：認定特定非営利活動法人 もうひとつの美術館

茨城県（センター未設置）

いばらき障害者芸術文化活動支援センター準備室



じょうほう し
「情報を知る」

はじまりの美術館の情報発信

はじまりの美術館のSNSでは様々な情報発信を行なっています。どれも無料でご覧いただけます。また、美術館のオハコカフェには全国の展示会のチラシやお知らせ、公募展情報などの広報物を配架しています。美術館にお越しの際は、お手にとってご覧ください。



Facebook

はじまりの美術館の活動やお知らせを発信しています。



Instagram

はじまりの美術館の活動や日々のできごとを発信しています。



twitter

はじまりの美術館の活動や来場者の感想を発信しています。



twitter

#福島県障がい者芸術文化活動支援センター

はじまりの美術館に届いた公募展情報などを発信しています。



note

カテゴリーごとに展示会や研修会などのお知らせや、展示会をスタッフで振り返る企画などの読みものを発信しています。



YouTube

はじまりの美術館でのオンライントークイベントなどを公開しています。

参考情報

この報告書を手にとってくださった方に、次に読んでいただきたい Web サイトをご紹介します。



厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業

<https://arts.mhlw.go.jp/>



知財学習推進プロジェクト

<https://chizai.goodjobcenter.com/>



日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS

<https://www.diversity-in-the-arts.jp/>



『どうしようからはじめるアーカイブ』

<https://fukushima.hajimari-archives.com/book>

福島県障がい者芸術文化活動支援センター

はじまりの美術館 - 2022年度事業報告書 -

編集	はじまりの美術館（岡部兼芳、小林竜也、大政愛） 佐藤恵美（p11-13、p16、p18、p20）
編集協力	佐藤恵美
編集補助	はじまりの美術館（青木早知子、中野美奈子）
写真	はじまりの美術館、吉田和誠（p.26-27）、白土亮次（p.28）、
イラスト	ふるやまなつみ
デザイン	藤城光
発行	社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館 〒969-3122 福島県耶麻郡猪苗代町新町4873 TEL. 0242-62-3454

2022年3月31日発行

©2022 HAJIMARI ART CENTER All Rights Reserved. 無断転載複写禁止



はじまりの美術館